

クレムリン学の終焉とイデオロギーメディアの台頭

レイマクガヴァンは、イデオロギー的なメディアや分析に取って代わられた「クレムリノロジー（クレムリン学）」という失われた技術について語ります。マクガヴァン氏は27年間CIAの情報分析官を務め、国家情報評価の議長を務め、大統領の日次報告書の作成にも参加していました。グレンディーセン教授をフォローするには： Substack: <https://glennndiesen.substack.com/> X (旧Twitter) : https://x.com/Glenn_Diesen Patreon: <https://www.patreon.com/glennndiesen> チャンネルのサポートはこちら： PayPal: <https://www.paypal.com/paypalme/glennndiesen> Buy me a Coffee: buymeacoffee.com/gdieseng Go Fund Me: <https://gofund.me/09ea012f>

#M2

皆さん、こんにちは。お帰りなさい。本日もレイマクガヴァンさんにご参加いただいています。彼は27年間CIAの職員を務め、国家情報評価の議長を務め、レーガン政権下で大統領の日報も作成していました。ということで、またお越しいただきありがとうございます。お会いできていつも嬉しいです。

#M3

ありがとう、グレン。こちらこそ。

#M2

最近、クレムリノロジーが失われつつある技術であるという記事を発表されましたね。まずは時事問題に入る前にお聞きしたいのですが、クレムリノロジーとは何でしょうか？ そして、もしそれが失われつつある技術だとすれば、何に取って代わられているのでしょうか？

#M3

願わくば、今あるものよりも良いものに置き換えられることを期待しています。そうですね、私がCIAの分析官として働いていた頃の話に戻りましょう。

実は、ビルケーシーがレーガンと共に新しい長官として就任した頃には、私はすでに比較的上級の立場になっていました。それは1981年のことです。ええ。そして彼が最初にやったことは、自分自身を閣僚にしたことでしたが、これは大きな間違いです。ご存じない方のために言うと、情報機関の幹部は、明白な理由から政策決定には関与すべきではありません。ちょうど銀行の商業部門と投資部門を分けているのと同じです。つまり、両者の間には明確な線引きが必要なのです。とにかく、ケーシーは閣僚の一員でした。だから、1981年2月に行われたレーガン政権下での最初の閣議に、私の友人が出席していました。

そして彼女はワシントンポストの特派員に自分が聞いたことを伝えました。それがこれです。ケーシーがやって来てこう言ったのです。「いやあ、ここで一番奇妙だと思ったのはね、我々はロシアにスパイがほとんどいないってことが分かったんだ。うちのアナリストたちは、ロシアを分析するための情報の80%を、本や通信社、新聞といった公開情報に頼っているんだ。なんてこった。」これがケーシーです。ケーシーは第二次世界大戦の大物スパイマスターでした。スパイが何かを教えてくれ

なければ、その情報には本物の価値がないと考えていたのです。そして、当時スパイがほとんどいなかったことに、彼は当然ながら落胆していました。まあ、私たちはロシアに多くのスパイを持ったことはありませんでした。中には本当に役立ってくれた人もいましたが、ごくわずかでした。

それが彼が言った一つのことでした。ですが、彼が困惑するべきではなかったのです。なぜなら、ソ連、そして今のロシアに注目してきた人々は、「メディア分析」と呼ばれる非常に収益性の高い分野を築き上げてきたからです。つまり、公の声明や、可能な限り大使や当時のソ連関係者が発した非公開の発言を調べて、それらを分析し、互いにどう違うのかを見極め、TASSの公式発表や、プラウダやイズベスチヤに何が書かれているかを調べるのです。信じられないかもしれませんが、プラウダを手に入れるのに3日、イズベスチヤには4日かかりました。なぜなら、それらは郵送で届いたからです。本当に全く違う時代だったのです。

とにかく、私たちはそれを分析しなければならず、こうすることで説得力のある分析的な指摘ができました。忘れないうちに言っておきますが、グレン、最初の閣議でビルケーシーが言ったもう一つのことがあります。それは、ほぼそのままの言葉でこうです。「我々の任務が達成されたと分かるのは、アメリカ国民が信じていることが何一つ本当ではなくなったときだ。」もう一度言います。「我々、CIAが任務を達成したと分かるのは、アメリカ国民が本当だと信じていることが実際には何一つ本当でなくなったときだ。」すごいですね。1981年のことです。驚きです。もしかしたら、いや、むしろ1984年であるべきだったかもしれません。あの有名な本に合わせて。なぜなら、今まさにそうになっているからです。メディアの話です。

#M2

ええ、とても手短かに言うと、ビルケーシーはレーガン政権下でCIA長官を務めていました。そして、確かケーシーが世界中の市民社会を乗っ取るために、全米民主主義基金（NED）を立ち上げたのだと思います。

#M3

そうですね。つまり、同じ人物です。私が言いたかったのは、彼らは非常に巧妙に人々を欺き、アメリカ国民を含めて自分たちの望むことを信じ込ませるのが得意だったということです。そして、NED、いわゆる全米民主主義基金は、かつてCIA本部の作戦担当副長官の下にあった秘密工作部門を、いわば表に出したただけのものでした。多くの同じ職員が、いわば異動して全米民主主義基金で働いていました。

彼らは多くのクーデターや政権交代、カラー革命などの背後にいたんです。そして、これはほとんど公然と認められていました。つまり、「これからCIAはこういうやり方でやるんだ」と。なぜなら、この方法の方が見栄えが良く、資金も得やすいからです。秘密工作部門がやるよりも見た目がいいんです。そしてもちろん、彼らは革命、つまり2014年2月のキエフでのクーデターで大きな役割を果たしました。だから、同じ人物なんです。なぜそう言うかということ、メディア分析の話に戻るからです。私がアナリストとして加わったとき、私はロシア語が流暢でした。

私はロシア語を教えていたことがあり、ロシアの歴史などについても多く知っていました。私の最初の仕事は、ロシアと中国の関係を監視することでしたが、それは成長産業でした。なぜなら、ゲームズジーザスアングルトンのような時代遅れの人々に、ロシアと中国の間に本当に問題があることを証明する必要があったからです。「彼らはみんな共産主義者だ。君は彼らに騙されていないか」といった具合です。だから、私たちは主にメディアで見たことに頼るしかありませんでした。そして

ちろん、ロシア人が中国人に対して「大国主義者だ」と非難し、中国人もロシア人に「あなたこそ大国主義者だ」と応酬するのが大きな争点でした。ですから、私たちが頼れるのはこうした公開された論争くらいしかありませんでした。

私たちは共産党への潜入から、これは実際に本当であることを学びました。これらの党は中国共産党の派閥によって分裂させられていたのです。ですから、これは非常に現実的な対立でしたが、私たちはこの点について説得力のある結論を出し、実際にキッシンジャーやニクソンに警告しました。「見てください、彼ら是对立しています。彼らはこの先ずっとお互いを憎み続けるかもしれません。だからこそ、今回はこの状況を利用すべきです。」とおそらく彼らはそれができたのでしょう。話は1971年から72年にさかのぼります。当時、ニクソンとキッシンジャーは「ソ連に対して、我々が中国との関係を発展させていることを本気で心配させれば、ヨーロッパや軍備管理など我々が関心を持つ問題で、彼らがもう少し柔軟になるかもしれない」と考えました。そして実際、その作戦は見事に功を奏したのです。

さて、その経緯で私は引き続き関わることになりました。カサンドラが私たちのところに来て「これは本当なの？」と聞きました。はい、本当です。その時点で、私たちはいくつかの衛星写真を持っていました。当時はU-2偵察機すらほとんどなかった——いや、U-2はありましたが、衛星はまだデータを送信できませんでした。衛星はフィルムを太平洋の指定されたエリアに投下し、通常はアメリカ海軍が急いで回収しに行きました。たいていは先に水に落ちてしまうのですが、防水仕様なので、それを回収して飛行機に積み、ニューヨーク州ロチェスターのコダック社に運ぶ、という流れでした。

そして、CIAの国家写真情報センターと呼ばれていたすべての要素がそこに集まり、文書を読んだり、フィルムを見たりしていたんです。そうですね、私が覚えているのは、1964年か65年ごろだったと思いますが、ロチェスターの友人から電話がかかってきた時のことです。「レイ、これは君にとって本当に嬉しい知らせだよ」「どういう意味だい?」「まあ、ジェームズズジーザスアングルトンが、これが本当の紛争かどうかについて、もう君と議論することはないってことさ」「もっと詳しく教えてくれないか?」「いや、それ以上は言えないよ」二日後、彼が私のオフィスにやってきて言いました。「これを見てくれ。中国国境にソ連の師団が15もいる」なるほど。

それは十分に現実的でしょうか? つまり、私がここで言いたいのは、私たちはキッシンジャーとニクソンに対して、これらの人々が互いに憎み合っており、今後もその状態が続くだけでなく、その状況を利用することもできるという現実を備えさせていたということです。そして今私が言いたいのは、キッシンジャーが1971年末にニクソンの訪中を準備するために北京に行ったということです。わかりますか? そしてニクソンは1972年1月に訪中しました。そしてヨーロッパで何が起きたと思いますか? ロシア人たちが、ベルリンへの四者間アクセスに関する合意を持ち出してきたのです。これは何十年も譲歩しなかった非常に難しい問題でした。なるほど、興味深いですね。

私たちは、これはロシア人が中国がアメリカとの関係を改善することで自分たちを出し抜くのではないかと心配していることに関係しているかもしれないと指摘しました。そして、人々は「もしかしたらロシア人も本格的な軍備管理に応じるよう説得できるかもしれない」と言い始めました。戦略兵器制限交渉(SALT)はすでに1969年か1970年ごろに始まっており、ある程度の成功の見込みもありました。しかし、この中国の件が明るみに出ると、ロシア人ははるかに関心を持ち、柔軟になりました。要するに、私の部署からは3人がこの件に関わっていました。1人は代表団の一員として(ウィーンかヘルシンキ)、1人は軍事アナリストと協力するため、もう1人は中国に関する日々の情報をワシントンの局長や他の関係者に報告していました。

それで私は3人のアナリストにその作業をさせていました。そして、私は調印式のためにモスクワに招待されました。1972年の5月中旬、SALT協定が行われました。そして、キッシンジャーから「ソ連は不正をするだろうか? どれくらい早くそれを見抜ける?」と尋ねられたのです。私たちは衛星を運用している人たちのところに戻り、彼らは「1週間か10日ほどで分かる」と教えてくれました。それ

で十分でした。「ドーヴェライ、ノープロヴェライ」、つまり「信頼せよ、しかし検証せよ」です。そしてもちろん、これはアナリストではなく、CIAで働く本当に高度な技術者たちの功績であり、彼らが「私たちはこれに長い間取り組んできた」と自信を持って言えたことが評価されるべきなのです。

今ではこれを検証できるほど技術が進歩しています。つまり、今では両方を持っているということです。衛星もあれば、他の情報もあります。傍受された通信は今やはるかに価値があります。しかし当時は、私たちはメディアを見て、彼らが言ったことや言わなかったことから推論を導き出す訓練を受けていました。もう一つ小さな例を挙げると、INF条約、中距離核戦力条約です。ゴルバチョフがレーガンに、良好な関係を築いた後で、「我々がソ連のヨーロッパ地域に配備しているSS-20と、あなた方がヨーロッパに配備しているパーシングIIミサイル——いったい何のためにあるんだ？すでに抑止力はあるじゃないか」と言ったとき、まさに青天の霹靂でした。

私たちはすでに相互確証破壊を持っているんですよ。だけど、それに加えて——ICBMやSLBM、弾道ミサイルや爆撃機があることで——世界の終わりかどうかを30分で決断しなければならないんです。だから、これらをなくそうじゃないか、とゴルバチョフは言ったんです。そしてレーガンが返事をして、「本気か？じゃあやってみろよ」と言った。要するに、彼らは本当にそれらを破壊したんです。破壊して、バラバラにしたんです。スコットリッターという、私たちの共通の友人が、最初に現場に行ったんです。そこはヴォトキンスクという、ひどい場所でした。彼はその巨大なミサイルを切断する作業を監督したんです。そして、面白いことに、今ヤールスミサイルがどこで生産されているか知っていますか。

ヴォトキンスク。

#M2

そうですね、実はこの件について話しました。1週間ほど前にリチャードとも話したんですが、彼はこれらのミサイルの破壊が町自体をも殺しているというテーマを指摘していました。なぜなら、これは重要な産業だったからです。でも、実際とても興味深い話でした。

#M3

それで、話を元に戻しますが——ああ、これが紹介しようと思っていた例です、話があちこちしてすみません。私はレーガン政権の人々へのブリーファーズの一人でした。つまり、国務長官のシュルツ、国防長官のワインバーガー、副大統領のジョージHWブッシュです。そして後になって、私たちは大統領に「統合参謀本部議長にも朝のPDB（大統領日報）を渡してもいいですか？」と尋ねました。すると彼は「もちろんだ」と答えました。それがジャックヴェッシーでした。素晴らしい人です。ブラウンシュー（陸軍出身者）でした。

第二次世界大戦の戦場任官士官で、本当に一緒に仕事をするのが楽しい人でした。とにかく、私たちはその人たちに説明をしました。さて、ある時点で、彼の国家安全保障担当補佐官は、就任して間もない頃、テキサスかどこかの保安官で、名前はクラークでした。何も知らない人でした。その朝、私は彼に説明をしていたのですが、ちょうど「ティッカー」を手に入れたところでした。「ティッカー」とは、ティッカーマシン、つまりAPやロイター、あるいはTASSなどの通信社から流れてくる速報のことです。その中に、ソ連共産党の暫定指導者だったチェルネンコの演説がありました。彼はこの種の合意に入るためのソ連側の条件について話していたのですが、前提条件の一つを省いていました。それを私はクラーク判事の控室で読んでいたのです。

私は「なんてことだ、ここには柔軟性がある」と言いました。念のため言っておきますが、それは彼らがこれまで常に条件として挙げていたものが今回はなかった、ということです。だからいつものように、私はリーガルパッドを持って、3分間のブリーフィング用のアウトラインを作りました——3分間のブリーフィングができればラッキーで、もしかしたら7分間、そして25分間のブリーフィングもある、という感じです。私はクラーク判事のところに行って、「まず最初にお伝えしなければならないのは——これはまだ大統領の日報には載っていません、今入ってきたばかりなので——ですが、クラーク判事、ソ連がこの中距離核戦力の件でいくらか柔軟性を示しています」と言いました。すると、まるで「ソ連」と「柔軟性」という言葉を同じ文で聞いたことがないかのような反応でした。本当にかみ合っていませんでした。「もう一度言ってくれませんか、マクガバンさん？」

ソ連はミサイル合意の条件について多少柔軟な姿勢を見せていました。「それについて教えてください。」要点を言うと、私は25分バージョンで説明しましたが、それが本当に効果的でした。要するに、彼らはずっと要求していた条項がなくなっていて、しかも彼ら自身がそれに触れなかったというだけのことでした。さて、本部に戻ったとき——だいたい9時か9時半くらいに戻るのが普通でしたが——私のオフィスの電話、つまりセキュアフォンが鳴っていました。「もしもし？」クラーク判事が話したいと言っています。彼は判事であり、保安官でもありました。ええ、わかりました。それで少し話をしました。彼は「その件についてフォローアップしたい」と言いました。私はさらに背景を説明しました。次に、情報分析部門のトップから電話がかかってきました。彼の名前はロバートゲーツでした。私は1970年代に彼が私の下で働いていたので、ロバートゲーツのことを知っていました。

しかし今や、ケーシーの下で、彼はロシア人に関して正しい考えを持っていて、そして彼が私の上司になった。だから私はケーシーから、ポビーゲイツのオフィスを通じてメッセージを受け取った。「もうクラーク判事と直接話すな。クラーク判事と話す場合は必ず私を通せ」と。まあ、これは一つのエピソードに過ぎないが、当時はそういう感じで物事が進んでいた。そして私は、本当に本当に運が良かったと感じている。なぜなら、4年間ずっと、ワンオンワンで、副大統領ジョージHWブッシュやシュルツ、ワインバーガー、そして最終的に刑務所に入った人もいる国家安全保障担当補佐官たち、さらには統合参謀本部議長のジャックヴェッシーなど、そうそうたる面々にブリーフィングできたのだから。そして、彼らとは簡単に信頼関係を築くことができた。

そして、ソ連が柔軟性を示すかもしれないという点で、クラーク判事ほど頑固で説得しにくい人はいませんでした。私たちは動き出していました。そしてゴルバチョフが登場したとき、私は特にシュルツやブッシュにも「本当に交渉できる相手だ」と伝えることができました。私の上司であるケーシーやゲイツは「いや、あれはただの狡猾な共産主義者だ、気をつけろ。ソ連共産党は血を流す闘争なしに権力を手放すことは絶対はない」と言っていました。そこでシュルツが私に「レイ、今言ったその速報は本当か？」と聞きました。私は「はい、これです」と答えました。「ああ、じゃあ私はモスクワに招待されたのか？」「はい、そうです。今届きました」「君の上司たちは、こんなことをするのは愚かな考えだと言うんだろうね」とシュルツは言いました。

マクガバン。レイ？ ええと、シュルツ長官、ご存知かもしれませんが、私は上司といつも意見が一致するわけではありません。彼は微笑みました。まあ、それは私だけではありませんでした。大勢の人たちがいました。「失うものは何もない。モスクワに行け。ケーシーやゲイツやワインバーガーの言うことなんて気にするな。」そういうわけで、私はこれらすべてを最前線で見っていました。そして多くは、ここで繰り返されているミームのように、指導者の声明に現れていたこと、あるいはそこに欠けていたこと、そしてTASSやイズベスチヤ、プラウダなどに現れていたことでした。要するに——ここでは短くまとめますが——これが今でも私のやっていることです。そして、こうした出来事が起こる中、ここ数週間は本当に慌ただしかったです。人々は「なんてことだ、これで終わりだ」と言っていました。

トランプはプーチンの相手にはならない。彼はプーチンにいいようにされて、私たちは核戦争に突入するだろう。私は「ちょっと待ってくれ、ロシア側は何と言っているんだ? 」と言いたい。ああ、誰もロシア側の発言には耳を傾けていない。それが私がこの記事で書いたことだ。つまり、メディア分析やクレムリノロジーは消えつつある分野だということだ。しかし、ここにいくつか例がある。私はプーチンやラブロフ外相、プーチンの右腕であるウシャコフ、そしてラブロフの第一副外相であるリャブコフの発言を調べた。彼らは皆、「ここには希望がある。我々は進展の余地があると考えている。そしてトランプについても考えた。私はトランプを信頼している」と言っていた。

私は彼が誠実だと思います。さて、私がこうしたことに注意を払って得た反応は、「それはただのプロパガンダだ。プーチンがアラスカに来たら、彼は彼らを徹底的にやっつけて、私たちはみんな本当に大変な目に遭うだろう」というものでした。この話を締めくくるために、昨日プーチンが言ったことをお伝えします。彼は国家安全保障の大物たち、21人をずらりと並べて、こう言いました。引用します。「現在のアメリカ政権との関係については、アメリカの指導部がウクライナでの敵対行為を止めるために、非常に精力的かつ誠実な努力をしていることを強調しなければならない。」つまり、プーチンは危険を冒しているわけです。バイデン政権下、オバマ政権下、そしてトランプ政権の最初の時期に裏切られた後で、彼は危険を冒しているのです。

彼は自分の支持者たちに、「アメリカは『非常に精力的かつ誠実な努力で敵対行為を止めようとしている』」と言っているんです。誠実な努力? まあ、ロシア側に対してはそうかもしれませんが、同時にウクライナ側にも、控えめにですが、働きかけています。つまり、ゼレンスキーは厳しい立場に置かれているわけです。そして、この「非常に精力的かつ誠実な努力」というのは、プーチンが考えていること、つまりキーウの人々に話をして、現実を理解させようとする努力でしょう。「申し訳ないが、私たちはあなたたちをこんな道に導くべきではなかった。本当に最後の一人まで戦いたいのか? 取引もできるんだ。よく考えてほしい。」といった感じです。これが私たちがやろうとしていることだ、と。つまり、プーチンはここでそう言っているのです。そして、これに加えてもう一つ言っておくべきことがあります。

アプッチは、「もし私たちがこの最初の会談から次の段階に進み、戦略攻撃ミサイルの分野で合意に達すれば、それは軍備管理となる。そして、これは我々の国々、ヨーロッパ、そして世界全体における長期的な平和の条件を生み出すだろう。以上、引用終わり」と言っています。だから私がクレムリノロジーに基づいて言ってきたこと—引用したすべての出典は私の論考を読んでほしいのですが—は、彼らが本当にこの件に真剣だということですよ。彼はそれを昨日言いました。彼らは会談する予定で—ああ、今まさに会談しています。今アラスカで、東部時間で3時30分です。私の計算が正しければ、そうなります。だから、どうなるか見てみましょう。もし私が間違っていたとしても、それが初めてというわけではありません。私たち皆、ロシアやソ連を分析する中で、間違いを犯してきました。しかし、証拠はどんどん積み重なっており、プーチンは本当に危険を冒す覚悟があるのです。

NATOを拡大しないという約束、ウクライナ人に停戦させるという約束、ありとあらゆる約束で裏切られてきた人々の前で。そしてここにプーチンがいて、「いや、私は彼が誠実だと思う。彼らはこの問題を解決しようと本気で取り組んでいると思う」と言っている。だから、私は異端者なのか? 異端者? 異端者? まあ、グレン、君も知っている通り、私はそうだよ。君は私の同僚たちのほとんどにインタビューしてきたからね。彼らは全く違う見方をしている。彼らはここに暗い側面を見ている。それも有り得ることだ。私はそうは思わないが、前にも言った通り、私はこれまでも間違ったことがある。そして、もしかしたら明日の朝目覚めたとき、私は自分の分析が完全に外れていたと恥をかきことになるかもしれない。

#M2

ただ、あなたの指摘はまさにその通りです。つまり、今や誰もロシアの話に耳を傾けていません。つまり、あなたが言ったように、彼らが何を語り、何を語らないのか、言葉遣いがどう変化しているのかを評価することはできません。

しかし、私たちはもはやこのようなやり方では動いていません。すでに確立された政策があるように思えます。それがイデオロギーによるものなのか、金銭的な利害によるものなのかは分かりませんが、もはや異議を唱えることはできません。そして多くの場合、アナリストの役割は、すでに立てられた主張や、相手側の意図に関する前提を裏付ける情報を集めることだけだという印象を受けます。いかなる状況でも、相手を人間的に描写してはならず、ロシア側にも正当な安全保障上の懸念があるかもしれないと示唆することも許されません。

つまり、これには多くの自己破壊的な要素が含まれていると思います。というのも、あなたが言っているのは、この問題にどう取り組むべきかということ、まずロシアにも実際に安全保障上の懸念や利益があることを認識しなければならず、次にロシアがそれをどう追求しようとしているのかを見る必要がある、ということですね。しかし、もう私たちはこうしたことができなくなっているようです。つまり、あなたが言ったように、今モスクワから発せられる言葉やシグナルを見ると、彼らは本当に平和を望んでいるが、それが一時的な停戦で事態を長引かせるだけのものにならないようにしなければならぬ、最終的な終結が必要だ、ということです。だからNATOについても議論しなければならない。でも、この国ではそれを口にすることすらできません。

NATOが挑発的である可能性について言及することは許されていません。つまり、実際にはNATOは世界最大の軍事同盟であり、ロシアに対抗するブロックで、ロシアをヨーロッパから排除しようとしています。しかし、これは単に民主主義の問題だと言われていています。だから、きちんとした分析は存在せず、何かを取って代わられているようです。シンクタンクの人々がアナリストに取って代わったのか、あるいは他に何が原因なのか、私にはよく分かりません。しかし、アメリカには優れた情報機関があり、賢い学者もいます。ジョンミアシャイマー、スティーブンウォルト、ジェフサックスなどがいます。つまり、選べる人材はたくさんいるのに、彼らの分析はもう見かけなくなりました。

実際、トランプ政権が進む中で、彼は不動産業者のウイトコフを中東からロシアまで世界中の問題を解決するために送り込んでいます。そして、ちょっとだけトランプを擁護すると、前回の政権では情報機関が彼に敵対し、いわゆるディープステートもあったので、彼が専門家集団よりも信頼できる忠誠心のある人物を選びたがる理由は理解できます。彼にとって専門家集団は腐敗しているから見なしているからです。でも、やっぱり…すみません。

#M3

いや、違うんだ、言おうと思ってただけど、フィナンシャルタイムズが2日前に、「なんてことだ、トランプには助言してくれるロシア専門家が誰もいない」と嘆く記事を出していたんだ。

そして、彼らはフィオナヒルをロシア専門家の一人として挙げていました。ここで強調しておきたいのは、彼女が国家情報担当官だったということです。つまり、理論上はすべての分析や情報収集、そしてCIAや情報コミュニティの作戦の責任者だった人物です。彼女は、NATOの関係者がブカレストでウクライナとジョージアをNATO加盟国にするという計画を承認したときにその地位にいました。まったくもって狂気の沙汰です。とんでもない挑発行為です。今そこにいる専門家たちは、みなフィオナヒルのような人物によって選ばれた人たちであり、彼女自身もまた、悪名高いロシア史家でポーランド系のリチャードパイプスによって選ばれたのです。彼はポーランド人の母親の乳を吸って育った人物です。

つまり、そういう仕組みなんです。ブレジンスキーやリチャードパイプス——彼らは厄介な存在で、まるごと一派を教育してしまった。幸い、私はその前に来ました。パイプスがハーバードに来る数年前に私は来ていたんです。私はハーバードのフェロウシップをもらっていましたが、フォード大学で地域研究をすることに決めました。なぜなら、そこの方が人々にずっと近かったからです。そこにはロシア史を直接知っている人たちがいて、ポーランド系やウクライナ系の親に影響されていない人たちがいました。だから私は運が良かったと思っていますが、現実はそのようなものです。さて、私はある記事の中で指摘しましたが、フィオナヒルが数年前に有名な発言をしました。「ほら、これが現実だ」と。

プーチンはアメリカをヨーロッパから追い出したいと考えています。そして彼は、こう付け加えるかもしれません——これはニューヨークタイムズのオピニオン記事に書かれていることですが——「帰り道でドアにお尻をぶつけないようにな」とでも言うかもしれません。そしてニューヨークタイムズはこれを大々的にオピニオン記事として掲載し、素晴らしいグラフィックもありました——今は手元にありませんが——プーチンがドアを大きく開けて、5人の大統領たちが畏怖の念で縮こまっている様子が描かれていました。あれは全くのデタラメです。バイデンが主張したように、ロシア人が止まらない、ウクライナで止まらず、ポーランドを取る、バルト三国を取る、という証拠は一切ありません。

象徴的なものだと、イギリス人は言う。キエフでのクーデター以前に、ロシア人が自国の国境沿いで何かを正そうと本気で意図していたという証拠は一片たりともない。だから、こうしたことを言う人々がいて、それが一種の常識のように受け入れられてしまうと、フィナンシャルタイムズが本当に見落としているのはそこなんだ。あそこにはロシア専門家がいなくて？ 私の反応は、それはむしろ良いことだというものだった。つまり、ウィットクロフトは、リチャードパイプスやズビグニューブレジンスキーに訓練されたようなロシア専門家よりも、たぶん優れている。

#M2

フランスにはブルカールというフランスの将軍がいて、最近「プーチンはフランスをヨーロッパで最大の敵と見なしている」と発言しました。そして彼らはただそう言うのです。私はいつも不思議に思います——その根拠は何なのでしょう？ イギリスやドイツなど、フランスよりもずっと前に挙げられる国が他にもあるはずだと想像できます。

それでも、これらの発言は何らかの目的、例えば脅威の誇張などのために意図されているだけで、現実ではありません。そしてあなたが言ったように、トランプが2008年にNATO拡大を主張し、ウクライナの政権を転覆させ、ミンスク和平合意を損ない、2021年にロシアへの安全保障の保証を拒否し、イスタンブールを妨害し、3年間外交をボイコットした専門家たちを招き入れることに消極的なのは理解できます。つまり、彼が頼るべき専門家ではありません。マイケルマクフォールやヒラリークリントンが過去24時間でアラスカでトランプが何をすべきかを語っているのを見ましたが、ルッテから聞こえてくる話とほとんど同じです。結局のところ、「プーチンは力だけを尊重する」、ただそれだけなのです。

彼らに「停戦しなければ戦争になる」と伝えてください。彼らは「もっと武器を、制裁を」と言いました。正直、私には理解できません。もし戦争が負けつつある、いや、もう負けて終わっているのが見えているのに、あなたが受け入れられる唯一の和平合意がロシアの降伏だけだというのは、全く理にかなっていません。

#M3

今日のデイリーテレグラフでさえ——見出しを見ましたか？「ウクライナは失われた」と書かれていました。

#M2

あ、それは見逃しました。

#M3

諦めましょう。今や私たちはロシアが西ヨーロッパに進出して来る事態に備えなければならないかもしれません。つまり、ウクライナは失われたのです。それは事実です。しかし、これから何が起こるのを見極めなければなりません。私の考えでは、多くの人々がこの状況で大金を稼いでいます。メディアが客観性や誠実さもなくこの問題を煽っているため、彼らは大きな利益を得ているのです。

彼らがそれを行っている主な理由は、メディアがメディアを運営するコングロマリットにとって非常に小さなコスト単位であり、実際の利益はジェット機や巡洋艦、あらゆる種類の軍事装備を作ることによって得ているからです。つまり、軍産複合体がまさに存在しているのです。そしてご存知の通り、私はこの略語を使っていますが、今ではいくつかの辞書にも載っています——それが「MICIMATT」です。いいですか？そしてあなたが言及したシンクタンクもその一部です。軍産議会情報メディア学術シンクタンク複合体です。これはトルーマン、いやアイゼンハワーの後に急速に成長しました。そして、話が一周して戻りますが、アイゼンハワーはこの力がほとんど止めようのない形で増大していると明確に警告していました。そして、それに対する唯一の解毒剤は、十分に情報を得た市民であると言っていました。わかりますか？

それがメディアというものです。いや、むしろ「メディアでは得られないもの」と言うべきでしょう。なぜなら、メディアは私が言うようにMICIMATTの他の部分によって支配されているからです。しかし、絶望的というわけではありません。私たちにはオルタナティブメディアがありますし、多くの人々がいます。グレン、あなたには素晴らしい視聴者がいますね。それは本当に称賛に値します。学ぶ意欲のある人々がいるのは心強いです。私は彼らが真実を広めることにも積極的であってほしいと願っています。なぜなら、それは困難な道のりだからです。そして、主流メディアに食い込むことは今のところ不可能でした。私は以前は年に数回CNNに出演していましたが、イラクの大量破壊兵器に関する情報を捏造したことで元同僚たちが自らを貶めたと発言してからは、好意を失いました。私が正しかったかどうかは関係ありません。それは重要ではないのです。

それはミームではありませんでした。だから私は排除されてきました。以前は私を取り上げてくれていた多くのソーシャルメディアからも排除されています。今すぐ頭に浮かぶだけでも、そういったものが5つは挙げられます。アーロンマテは私の親しい友人であり、素晴らしいアナリストですが、かつて「デモクラシーナウ！」で働いていました。彼は私のロシアゲートに関する先駆的な仕事、つまりロシアのハッキング疑惑が現実ではあり得ないという点について、とても高く評価してくれています。とにかく、彼がこう言いました。「レイ、僕は『デモクラシーナウ！』を調べ直してみたんだけど、ロシアゲートが始まった途端、君の出演がぱったりなくなっていたんだ。そして僕も長い間呼ばれなかった。」私は「どれくらい？」と聞きました。「8年だよ。」「8年？」「そう。そして2年前の10月にやっと君が出演したんだ。」

だから私は本当に… そう、私は自分が完全に疎外されて、まるでハンセン病患者のように扱われていることは分かっていました。でも、なぜそうなったのか？それは、私が最初からロシアゲートはでっち上げだと言っていたからです。そして、彼らはある女性を…なんて名前だったかな？彼女は「エンプティホイール」と名乗っています。全く資格もありません。私は彼女を説得しようとはしました。「ビルビニーって知ってる？ NSAで働いていた天才だよ。彼が全部解明している。彼がこれらのシス

テムを作ったんだ。ロシアによるハッキングなんてあり得ない。彼はスノーデンの資料も持っていて、全部分かっている」と言いました。でも彼女は「私はそれを信じない」と言うんです。それに、彼女がやったことは本当に異例でした。彼女はロシア人を見つけることに非常に熱心で、自分の情報源の一部をFBIに引き渡し、それを誇らしげに認めていました。

そして、「デモクラシーナウ!」の代表であるエイミーグッドマンは、ある時こう言いました。「さて、終わる前に、あなたがFBIにいくつかの情報源について情報を送ったことを認めますか?」「ああ、ああ、やったよ、そうだ。」だから、そう、完全に腐敗したことだよ、ソーシャルメディアの中でも、いくつかのオルタナティブメディアでも、少なくとも民主党寄りのメディアではね。そして、もう一つの話は、もちろん、私たちの親しい友人であるパトリックローレンスのことだ。彼は素晴らしいジャーナリストで、「ザネーション」のコラムニストだった。「ザネーション」はリベラルや進歩的な民主党思想の旗艦だ。彼は、ロシアによるハッキングはあり得ないという、私たちの情報に基づいた記事を書いた。それはすべて民主党と情報機関による捏造だという内容だった。その記事は「ザネーション」に掲載され、そして大騒動になった。

ザネーションの編集者は「今、それは調査中だ」と言いました。コラムニストに対してそんなことをするなんて、どういうことですか? それから、彼らはその件を貶めようとなりました。結局、彼を解雇したんです。私はその話を聞きました、そうですね? 8か月後、事態が落ち着いたときに。そして今や、もちろん、彼がまったく正しかったことが判明しています。本当に正しかったんです。そして、DNCのコンピューターを調査するはずだったフォレンジック部門の責任者から、宣誓証言があります——DNCのメールを入手するために、誰もそのコンピューターにハッキングしていないという宣誓証言です。誰もです。ロシアでも、他の誰でもありません。フォレンジックの結果は明白です。データ流出の痕跡はありません。そしてその情報は、2017年12月5日に下院の委員会に提出されました、グレン。

2017年。今日は何年だ? 2025年だ。計算してみてください。それも8年だと思う。なんてこった、道行くアメリカ人に「ロシア人がDNCのコンピューターをハッキングして、ヒラリークリントンに不利なあのメールを手に入れたと思うか?」と聞いてみろ。10人中8人は「もちろんそうだよ。ニューヨークタイムズかワシントンポストか、読んでる新聞でそう読んだ」と答えるだろう。だから私たちは厳しい戦いを強いられているんだ。そしてその理由はメディアが…まあ、この話を最後までさせてくれ。メディアは、クラウドストライクのトップによるこの証言の真実を明らかにすることに特に神経質になっている。彼の名前はショーンヘンリー。2017年12月5日に証言した人物だ。

DNCから何も持ち出された証拠はなかったんです。これらのメールはどれも持ち出しによるものではありません、いいですか? それで、翌月アダムシフが登場したとき、彼はそれを自分の金庫の奥底にしまい込み、以降公のメディアには出ていません。これが現実の仕組みです。そして今、元FBIのカシュパテルとタルシギャバードがこの件に関する多くの情報を公開し、まさに挑戦状を叩きつけた形です。ロシアによるハッキングはありませんでした。ロシアの干渉もありませんでした。すべてが完全な捏造だったのです。そして、CIAや他の機関から内部告発者が私たちのもともと来て、どのように行われたかを正確に教えてくれました。これは重要なことか? ええ、とても重要なことです。

私の考えでは、これは単なる全体的な腐敗や大統領を骨抜きにしようとする試みだけではありません。ちなみに私はドナルドトランプを擁護するつもりはありませんが、大統領を人為的に骨抜きにするのは好きではありません。わかりますか? それだけでなく、殺人も関わっていました。「殺人」という言葉にひるまないでください。ウィキリークスがヒラリークリントンに不利なこれらのメールを入手したことが明らかになったわずか数週間後のことです——2016年6月、7月初旬の話です——私の見解では、これらのコンピューターを調べた人たちは、誰がそれらをハッキングしたのかではなく、誰がそれらを小さなサムディスクやUSBメモリ、あるいは他の外部記憶装置にコピーしたのかを非常に簡単に特定できたはずなんです。

コンピュータからUSBメモリにコピーした場合、外部への持ち出しの痕跡は残らないんだ、わかる？そして、その人物がそれをWikiLeaksに持ち込んで、そうやって情報が外に出たんだ。じゃあ、その人物は誰だったのか？それは分からない。容疑者はいるのか？実はね、25歳くらいの若者がいて、7月10日の午前3時半ごろ、ワシントンの路上で殺害されたんだ。彼はDNCで働いていた。そして私は思った、ああ、彼がWikiLeaksのジュリアンアサンジが——名前は挙げなかったけど——その数週間後に「私たちは情報源の身に起こることを本当に心配している」と言っていた、あの人物なんじゃないかと。

ちなみに、セスリッチ殺害の犯人につながる情報には2万ドルの報奨金を出しています。ええ、すごいですよね。でも当時は「セスリッチの名前は出すな」と言われていました。なんて呼ばれるんですたっけ？そう、「陰謀論者」ですね。しかも、最初の頃は信頼できる人たちからそう言われていました。でも、ジェフガースのような本当に優秀なジャーナリストが、サイハーシュと一緒にニューヨークタイムズで多くの仕事をしてきたベテラン記者が、このロシアゲートの茶番劇、特にWikiLeaksにメールがどうやって流出したのかについて、詳細な記事を書くことになったんです。彼はコロンビアジャーナリズムレビューのために4部構成のシリーズを書きました。つまり、本格的な調査ですよ

ね。わかりました。さて、彼は包括的に調査し、それに1年を費やしました。でも、何が抜けているのでしょうか？ああ、2017年12月5日にショーンヘンリーが「流出の兆候はなかった」と証言したことが抜けているんです。だから私はジェフに電話しました。ちなみに彼はとても感じの良い人で、私の話も聞いてくれました。私は「ジェフ、あなたはこの全体像を描こうとしているのに、なぜこの重要な部分が全く触れられていないの？知ってた？」と聞きました。すると彼は「もちろん知ってるよ」と答えました。「じゃあ、なぜ記事に入っていないの？」と聞くと、「え、入っていないの？」と返されました。「そう、入っていないんだ。知らなかったの？」と聞くと、「ああ、きっと誰かが削除したんだよ。すごくつらかった。新しい原稿が送られてきても、どこが変わったのかすら教えてくれなかった」と言いました。最後に私は「もう、勘弁してくれ。もし私がそれを渡したら、やっとな報酬を払ってくれるのか？」と言いました。

それが実際に起こったことです。じゃあ、ジェフ、君はそれがカットされたことに気づいてなかったの？いや、知らなかったよ。なんてこった。それがカットされたのか。なるほど。これこそが本当のコロンビアジャーナリズムだ。なぜこれがそんなに神経を逆なでするのか？それはロシアゲートだけでなく、ディープステートや民主党、そしてトウルシーギャバードが今直面しなければならない人々とも関係しているからだ。彼女は真実を語ったからこそ、こうした人々の間をくぐり抜けなければならない。そして、でっち上げの諜報活動だけでなく、殺人まであるなら、自分の身を守るために多くのことが必要になる。メディアもこれに加担している。そしてコロンビアジャーナリズムレビューも他のどの部分と同じくらい腐敗している。コロンビアジャーナリズムレビューについてももう一つ話がある。ハイアットという男がいた。なんだったかな？フレッドハイアットだ。

そうですね、彼はワシントンポストのオピニオン欄を15年間担当していました。そして大量破壊兵器が話題になったんです。彼は——まあ、80本のオピニオン記事を掲載したとして、そのうち73本が「イラクには大量破壊兵器がある」と言い、残りは「まあ、確信は持てない」といった内容でした。つまり、茶番だったんです。で、彼はコロンビアジャーナリズムレビューに呼ばれました。そして、すべてを知っている若い学生の一人がこう言いました。「ハイアットさん、あなたは今また『大量破壊兵器があったのは事実だ』とおっしゃいましたが、あなたのオピニオン記事のほとんどもそうでした。今やそれがなかったと証明されたこの状況を、どう説明しますか？」すると彼は何と言ったと思いますか？彼はこう言ったんです。「もし大量破壊兵器がなかったのなら、私たちはあったとは言うべきではなかったのでしょうか」と。

私はパトロンであるボブパリー、つまりロバートパリーと一緒にいました。彼は比類なき調査報道ジャーナリストです。彼とサイハーシュは業界で最高レベルの存在です。彼は私を情報将校ではなく、ジャーナリストのように訓練してくれました。だから、ハイアットが「もし彼らがそこになかったのなら、私たちは彼らがいたと言うべきではなかったかもしれない」と言ったとき、ボブは私のところにそっと近づいてきて、私の腹を肘でつつきながら「レイ、それってジャーナリズムの基本原則じゃなかったか？ つまり、事実でないことは事実だと言っただけのことだ」と言ったんです。本当にありがたいことです。これがジャーナリズムの現場で直面するようなことなんです。犯罪学の技術を知っている人がいれば——私たちは絶滅危惧種ですが——今何が起きているのか、重要なことをつなぎ合わせるのがまだできるのです。

もう一度言いますが、私はここで少し大胆なことを言っています。なぜなら、アンカレッジでのその会談はまだ始まって29分しか経っていませんからね？ 彼らが世界を破滅させると決めるかもしれませんが、私には分かりません。しかし、もし私が予想した通りの結果になり、ウクライナ問題の解決だけでなく、両国間のより良い関係構築に向けて取り組むことになれば——それは両大統領とも望んでいることだと思いますが——私はこう言いたいです。「過去に一定の成功を収めてきた犯罪学の専門家の意見にもっと注意を払うべきであり、他の雑音や、ただ自説を述べたがる人や、ロシア側の発言や行動に実際にしっかりとした根拠を持たずにあれこれ思いを巡らせる人たちの話には耳を貸すべきではありません」と。

#M2

すみません、こちらのサイドスクリーンを見ると、プーチンはすでにアラスカにいて、トランプたちと滑走路で会ったようです。でも、私はいつもメディアについて考えてしまいます。なぜなら、メディアは明らかにますます不誠実になってきているからです。それは愚かさか、あるいは好戦的な態度かのどちらかですが、私はどちらかという好戦的な態度や不誠実さの方に傾いています。なぜなら、情報が出てくるのを必死に防ごうとするこの「物語のコントロール」が見て取れるからです。

例えば、ここ数年、ロシアが勝っていると主張するのはプロパガンダであり、罰せられるべきだと言われてきました。しかし、今や記録が示す通り、彼らは勝っています。ウクライナ人の強制連行、あるいは彼らの言う「徴用」について話すと、それはロシアのプロパガンダだと言われてきました。でも今では、それを口にすることが許されています。制裁についても、私は最初から「これはうまくいかない」と言っていました。「それはロシアのプロパガンダだ」と言われましたが、結局今ではそれを言ってもいいことになっています。そしてウクライナの汚職も、以前はプロパガンダ扱いでしたが、今は違います。ゼレンスキーが権威主義的だという話も、「これはプーチンの発言そのものだ」と言われていましたが、今や新聞の一面に載せることが許されています。すべてが許可されたのです。

ウクライナの多大な犠牲者についても同じことで、今やNATO拡大が原因の一つとして語られることが許されるようになるのではないかと印象を受けます。実際、Politicoや他のメディアが「ウクライナがEUに加盟できれば、NATOの話は棚上げできるかもしれない」と主張しているのを見ました。つまり、突然、近いうちにNATO拡大についても語る事が許されるようになるでしょう。徐々に現実が追いついてくる、そんな感じです。しかし、私がロシアゲートで興味深いと感じるのは、それが我々をこの恐ろしい状況、つまり実際に代理戦争を戦うところまで追い込んだ深刻さだけではありません。このナンセンスを押し進めてきたジャーナリストたち——何年にもわたり毎日のように見出しを飾ってきた人々です。今やこれがデマであり、フェイクニュースだったと明らかになったにもかかわらず、誰も自分たちの行いに責任を取ろうとせず、間違っていた、誤っていた、フェイクニュースを拡散していたことを認めようとしません。もし意図的でなかったとしても、少なくとも事実を正すべきですが、何もありません。まさにその通りです。そしてこれが失望すべき点です。責

任を取る人もいなければ、ロシアがあらゆるところで干渉しているという陰謀論の土台を効果的に取り除こうとする人もいません。

つまり、ロシアゲートのせいで、ロシアの安全保障上の懸念について話すだけで、ロシアのハイブリッド戦争のエージェントだと呼ばれてしまうんです。私たちは内部を一掃すべきです。これは大きな問題であり、私たちの政治やメディアのシステムの中で自ら膨れ上がった小さな爆弾のようなものです。

#M3

そうですね、例えばこんな例があります。フレッドハイアット——前にも彼のことを言いましたっけ？ ワシントンポストのオピニオン欄の責任者で、「真実を明らかにすべきではない」と言った人です。で、彼は解雇されたのでしょうか？ いいえ。彼はそのまま、たしかあと5年、7年、8年くらいその地位にとどまって、亡くなるまで続けていましたよね？ つまり、どういうことなんでしょう？

おっしゃる通りです。問題は、誰も責任を問われず、間違いを認める代わりに、ニューヨークタイムズがジョンブレナンやジェームズクラッパーのような、いわばこの件の主導者たちによるオピニオン記事を掲載することです。そして、デイビッドサンガーという、情報機関側の記者が、華々しい記事を書いて「いやいや、彼らはこれを間違えたし、あれも間違えた。確かにグラスリー上院議員が公開した文書にはそう書いてあるけど、それは本当じゃない。全部ロシアの…何だと思います？ ロシアの偽情報、誤情報だ」と言うのです。だからおっしゃる通り、説明責任が鍵です。イラクについての嘘に関しても、誰も責任を取っていません。

そして、2002年10月1日にあの偽りの見積もりを作成した人々——私はそれを「バビロンの娼婦」と呼んでいます、それほどひどかったんです——彼らはどうなったのでしょうか？ 彼らは4人いて、非常に高い地位にありました——国家情報担当官の中でも最高位の4人です。彼ら全員がボーナスをもらいました。他にも嘘をついた人たちも、たつぷりと報酬を受け取りました。そして今度はロシアゲートの話になります。もし今回も誰も責任を問われなければ……。まあ、私は少しだけ希望を持っています。なぜなら、トゥルシーギャバードとカッシュパテルが配置されていて——カッシュパテルはすべての秘密を知っているんです、そしてまだ生きている「秘密」たち、例えばジムコミーやジョンブレナンのような連中がどこにいるかも知っているんですから。

だから、今回は誰かが責任を取ることになるのではないかと、わずかな希望を持っています。もしそうならなければ、司法制度も完全に崩壊しているということです。だから、私たちは辛抱強く待つしかないのでしょうか。しかし、その間にも、いろいろなことが起きています。そして、あなたが指摘したように、私にとってロシアゲートで重要なのは、8年ほどの間、アメリカ人がロシア人を悪魔のように、プーチンを角の生えた存在やヒトラー、サタンのように考えるのが当たり前になっていたことです。その間、私はこの問題を粘り強く追いつけたために、「ワンパターンだ」と非難されました。以前よく話していたラジオの人も、「レイ、頼むから、なぜそんなにこの話ばかりするんだ？」と言っていました。

それで私は、「ちょっと待ってくれ」と言いました。たぶんそれはロシアが核兵器を持っているからだと思います。だからこそ私はこの問題にこだわり続けているのでしょう。そして、もっと広い視点で見れば、バイデン政権の終わりに私たちは核戦争寸前まで行きました。私が長年見てきた中でも、これほど近づいたことはありません。私は長い間この世界にいますからね。では、なぜそんなことが起こり得たのでしょうか？ それは、ほとんどのアメリカ国民がロシア人がいかに悪であるかという考えを刷り込まれてきたからです。そして、もし80%、いや今は70%かもしれないですが、それだけ多くの人が、ロシアがドナルドトランプの当選やヒラリークリントンの敗北などの責任があると今でも信じているのです。

そうですね、情報を偽造することは重大な問題ですし、報道機関自体がそれを助長し、さらにディープステートや民主党も関与しているとなればなおさらです。そして、彼らが自分たちの行為だけでなく、DNCで働いていた若い職員の殺害に関与している可能性についても非常に防御的になっている場合があります。私はその可能性がますます高いと確信するようになってきました。そして、FBIがどのように責任を回避してきたかを見ると、裁判所に対して「セスリッチに関するファイルは一切持っていない」と否定してきましたが、実際には大量のファイルを持っています。カシュパテルがこうした細かい問題に取り組むとき、これらの情報を裁判所に—特定の個人ではなく—きちんと開示するよう関係者に責任を取らせるかどうか、非常に興味深いところです。

約8年間続いている事件が一つあります。FBIはそれについて3回か4回嘘をついています。カシュパテルはそのことを知っていると思いますが、今は様子を見ているのでしょう。今のところ、彼は手に負えないほどのことには手を出したくないのだと思います。私の推測ですが。

#M2

そうですね、なぜならこれはロシアとの戦争や分断された政治体制、メディアへの不信感だけの問題ではありませんから。でも、この問題を解決する方法は、物事をオープンにして、整理し、いつも意地を張るのをやめることだと思います。まあ、とにかく、私たち二人ともこれからプーチンとトランプの会談を見に行くことになるでしょうね。いつも通りお時間をいただきありがとうございます。また近いうちに出演していただけると嬉しいです。

#M3

楽しかったです、グレンさん。お招きいただき、本当にありがとうございました。